

生物多様性の保全と持続可能な利用に向けて

JATAなど参画4団体の取組みを紹介

2011年から2020年までの10年間は、国連の定めた「国連生物多様性の10年」です。2010年10月に名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)で採択された生物多様性の保全と持続可能な利用に関する新たな世界目標である「愛知目標」の達成に貢献するため、国際社会のあらゆるセクターが連携して生物多様性の問題に取り組むこととされています。

2011年9月には、国、地方公共団体、事業者、国民、民間の団体など、国内のあらゆるセクターの参画と連携を促し、生物多様性の保全と持続可能な利用に関する取組みを推進するため、「国連生物多様性の10年日本委員会」(UNDB-J)が設立されました。JATAをはじめ、UNDB-Jの参画31団体の中から4団体による生物多様性に関わる取組みの報告を紹介します。

＜JATA＞

責任あるツーリズムを推進

JATAは約1200の旅行会社を会員に、国家試験「総合旅行業務取扱主任者」代行や旅行会社の研修、官公庁関係機関への政策提言、海外・国内・訪日旅行の需要喚起・創出事業を行っています。新興国を中心に国際交流人口が10億人超(2030年は18億人超※)に拡大し、日本旅行市場の相対的低下の中、日本ツーリズムのプラットフォーム、アジア最大の旅行イベント「ツーリズムEXPOジャパン」を実施、「日本ブランド」に加え文化・歴史等に関心の高い成熟旅行市場「日本人ブランド」を世界へ発信しています。



環境省のみちのく潮風トレイルを活用したプロジェクトを実施

社会貢献活動は、2001年に富士山バイオトレイル設置、植樹活動、外来植物駆除活動、バリアフリー旅行推進を展開。2014年9月の国連世界観光機関「世界観光倫理憲章」署名を機に当憲章の活動目的「経済的発展や平和・繁栄に寄与、差別なく全ての人權を尊重・遵守のためにツーリズムを振興・発展、いわゆる責任あるツーリズムを推進に向け」旅行会社の事業活動による「社会課題の解決」(CSV活動)として環境省のみちのく潮風トレイルを活用した「JATAの道」プロジェクトを実施、道標整備や地元との交流等観光振興による東北地域の復興を進めています。

※出典 世界観光機関「Tourism Towards 2030」、数値は「国際観光客到着数」

＜大日本水産会＞

地球温暖化は日本の漁業にも影響

気候変動枠組条約第21回締約国会議が2015年11月30日から12月11日までパリで開催され、オランダ大統領は「テロとの戦いと地球温暖化との戦いは密接に関連している」と演説しました。TV番組サンデーモーニングでは、地球温暖化が異常気象を招き、2003年ダフル紛争や2006～2010年に発生したシリア

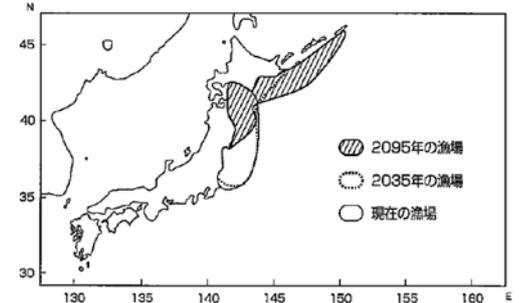
での大干ばつで、水不足が貧困層の拡大や紛争に発展したと解説されています。

昨年のは、「海洋水産白書」

生物は海水温の変化や塩分の変化に敏感で、水温が1度変化すると生息場所を変え、性質があり、仔稚魚は遊泳力が弱い為、この変化に対応出来ず死滅する可能性もある」と指摘しました。

近年、日本周辺海域の水温上昇がサンマやサケ、ブリ漁等に影響を与えています。一方、生物多様性の認知度が低下しているとの指摘があります。持続的漁業を認証する制度として本会が取組むマリン・エコラベルジャパン(MELジャパン)も認知度に課題があります。

地球は多様な生物が生きる場所であり、様々な関係の中で成り立つ集合体です。MELジャパンは、地球温暖化による海洋生物や食物連鎖等への影響で日本各地の漁業が被害に遭っていることをお伝えし、生物多様性の一部が損失している事実を皆さまに知っていただきたいと思ひます。



11月における現在と将来のサンマ漁場の変化(水産白書より)

〈日本自然保護協会〉

生物多様性保全を加速するために

日本自然保護協会は、暮らしを支えている自然環境の豊かさ＝生物多様性を調べ、守り、未来に引き継ぐため、全国の個人、団体、法人の会員やご寄付に支えられ60年以上活動を続けてきました。

UNDB-Jでは「Ikitomom」推進事務局として、推薦図書「生物多様性の本箱」寄贈活動やUNDB-Jウェブサイト、「生物多様性.com」などの情報発信、生物多様性条約締約国会議でのUNDB-DAYの企画運営を通じ多くのセクターの方々と協働



1978年から続く「自然観察指導員講習会」は、1泊2日の合宿で自然の見方を学ぶ(上)。自然しらべは、子どもから大人まで楽しみながら参加できる自然の健康診断

し、日本の生物多様性保全活動を世界に伝える役割も果たしてきました。

中間評価を受けUNDB-Jでは、「地域づくり」「消費・産業活動」「自然ふれあい」の3軸で、生物多様性の主流化を進めています。当会は、世界遺産やユネスコエコパークなどの国際的な保護地域制度も活用し、貴重な自然を守り、守った自然を活かし地域が活性化するモデルづくりを行っています。併せて、自然観察のボランティアリーダー「自然観察指導員」の養成や自然の健康診断「自然しらべ」、全国200カ所の里山の市民調査「モニタリングサイト1000」里地調査などで、自然の守り手を育成し、「自然のふれあい」の場の拡大に努めています。これからもより多くの地域、セクターの方々とともに生物多様性保全を加速させていきたいと考えています。

〈自然公園財団〉

にじゅうまるる活動への取り組みについて

にじゅうまるる活動の目標「普及啓発において、自然公園財団では、「自然ふれあい活動(自然ガイド)」及び「野生動物写真コンテスト」自然界に生きる野生動物たち」に取り組んでいます。

「自然ふれあい活動」は、素晴らしい景観の中で生物多様性を体感できる絶好の

「野生動物写真コンテスト」で自然に親しむ思想を普及啓発

「自然ふれあい活動」では、素晴らしい景観の中で生物多様性を体感。

フィールドである国立公園を舞台に、当財団が維持管理に携わる全国21の事業地で、昆虫観察や冬の森散策など様々なイベントを開催し、独自の自然ガイド事業を実施しています。毎年の実施状況は、全国トータル

ルで約1500回/年、参加者総数は約2万人/年に上ります。今後も、各活動の質の向上を図りながら、継続実施していきたいと考えています。

さらに、自然の中における野生の生きものたちの命と営みを写真で表現する「野生動物写真コンテスト」により、自然を尊び、自然と調和し、自然に親しむ思想の普及啓発に努めています。COP10を盛り上げるために平成20年度より開催し、今年度で9年目となります。これまで、全国各地、子供から大人まで幅広い方々の参加により、累計約1万1000点の応募がありました。この事業を続けていくことで、生物多様性の価値が広く理解され、それを保全し持続可能に利用するための行動に少しでも結びつくことを願っています。

生物多様性アクション大賞について 国連生物多様性の10年日本委員会(UNDB-J)事務局

「生物多様性アクション大賞」は、UNDB-J主催で、「たべよう」「ふれよう」「つたえよう」「まもろう」「えらぼう」という、生物多様性との関わりを自分の生活の中でとらえられるように日常の暮らしの視点から設定された「MY行動宣言5つのアクション」を参考に、全国各地で行われている生物多様性の保全や持続可能な利用につながる団体・個人の取り組みを募集・表彰し、応援するものです。



生物多様性という言葉には、ちょっと難しいイメージがありますが、たとえば地産地消で旬の食材を使う食堂(たべよう)、海や川、山での自然体験(ふれよう)、美しい自然や生きものの姿を言葉や写真で表現(つたえよう)、地域に残る伝統文化の保存(まもろう)、環境に配慮した商品開発(えらぼう)なども生物多様性の保全とつながる活動です。

これまでの3回で約380団体の応募がありました。毎年夏頃に応募を開始しています。

ぜひ、あなたの活動も「生物多様性」とつないで応募してみてください。

■生物多様性アクション大賞

<http://5actions.jp/award/>

■いきものぐらし～生物多様性 5つのアクション

<http://5actions.jp/>